

東アジアの平和と共生を求める 松江発のメッセージ

日本と韓国・朝鮮と中国の識者が複合的な視点を提示

(財)人間自然科学研究所 編著

▶ 朝鮮半島と日本列島の使命

3大核大国の結節点から和の時代が始まる

2・22刊 A5判192頁 本体1000円

(財)人間自然科学研究所



本書は、松江の地にある人間自然科学研究所の編著になる。松江といえば、矢道湖と中海を臨む「水の都」として知られる。出雲の国に連なる古代日本神話をイメージする人も少なくないだろう。出雲阿国、小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）やNHK朝ドラの『だんだん』なども楽しく連想される。旧制松江高校の出身者には、図書新聞の創業者である田所太郎がいる。田所は、同期の親友・花森安治とともに東京帝大在学中に『東京帝国大学新聞』の編集・発行にあたった。そこには田宮虎彦、杉浦明平らもいた。その後、田所は、東大新聞時代に培った見識によって『日本読書新聞』編集長を務め、戦後、『図書新聞』を興した。その意味で、松江は図書新聞発祥の地ともいえる。

本書には小松昭夫「朝鮮半島と日本列島の使命」、十宰洙・安斎育郎・小松昭夫による同タイトルの鼎談、李修

京「血と苦痛の涙で溢れる暗い未来を作らぬために」、孟白和として同せず、人間の正しい道、張可喜『和譲思想・東洋文化の核心』など、韓国・朝鮮、中国、日本にまたがる識者の論稿、講演が収録されている。またハーンが「神戸クロニクル」紙に寄せた8本の論説と曾孫の小泉凡の解説が再録されている。いずれも、日本と朝鮮と中国の友好関係をどのように形成し、東アジアひいては世界の非核平和をどのようににめざすかを考えさせ、読みごたえがある。

同研究所の小松昭夫理事長は、松江で生まれ育ち、松江を本拠地にする企業経営者である。高速シートシャッターや上下水道自動制御・監視システムの開発・商品化に成功しており、ベンチャービジネスの先駆けとして知られる。その小松理事長は、同研究所を軸にして東アジアにかかわる平和活動をさまざまな展開している人でもある。2009年の2月22日には、島根県

主権の「竹島の日」記念式典とは別に、講演会・シンポジウム「混沌の時代——出雲から陽が昇る」を開き、そこでドキュメント「安重根義士」を上映するなど、ユニークな活動をしている。「人類史の視点で地球経営を見据える理論」「人類の尊厳欲求が開花する共生の文化」を提唱している。そこから、朝鮮の領土である独島（竹島）に関連して、「対立状況にある朝鮮半島と、日本の間にある、竹島に象徴される抑制された対立構造は、『人類進化の入り口』という意味が込められている」と強調する（11ページ）。「対立」を逆転的に「共生」に転化するというのである。松江—独島という地理的な位置にあるからこそ、国家主義的な対立を排する立場に揺るぎがなく、「和」を求めてやまないのである。

同研究所のロゴは、北極とユーラシア大陸の側から東海（日本海）および日本列島を臨む図である。つまり日本列島の南北関係が逆さまになっ

ており、東海を中心に日本列島と朝鮮半島と中国、ロシアを俯瞰する図である。日本中心主義ではなく、この地域を「和の文化圏」にしようというメッセージである。

東日本大震災の被災と福島原発炉心溶融、その被曝という深刻な事態にやるせない思いを抱きつつ、世界共通語となっている「tsunami」の語源が、歴史的な大津波を題材にした小泉八雲原作『稲むらの火』の英文表記であることが

(S)

※人間自然科学研究所 〒100-0046 島根県松江市乃木福富町735-188、TEL 050-3161-2460、
<http://www.hns.gr.jp>

よりよき韓日交流のために②

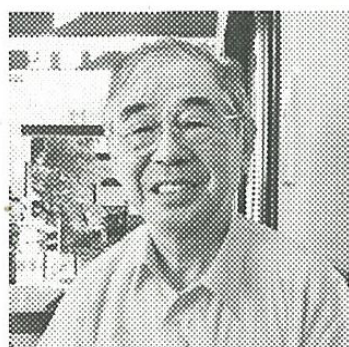
小松電機産業(株)社長 小松昭夫さん

「異なる立場から見える知らない一面」

——歴史を紐解く上で必要な視点は。

異なる立場に立って物事を観察し判断すると、知らなかった一面が見える。

太平洋戦争で敗戦した日本には施政権はなく、分割されようとしていた。ところが広島と長崎への原爆投下で状況が一変し、分割案は回避された。隣国の韓国(朝鮮)はしかし、朝鮮戦争後、



小松昭夫さん

東西冷戦で分割されてしまった。伊藤博文を暗殺したとされる安重根は、日本の判決に対して上告しなかつ

た。それにより、安重根は義士として

韓国で崇められた。日本では全く異なる。ところが当時、安重根に銃撃された満鉄役員の中には「最も尊敬するのは、残念ながら安重根だ」と言った人物がいる。この意見は人類進化の視点で現在に生かすことができる確信している。

——歴史的な事象が、各国の基軸になっている例とは。

ドイツはドイツ側の資金で、自国民と被害国民の共通の理解の下、ユダヤ人虐殺の記念館を作った。背景には、いかに大陸の中で共存するかという切実な課題があったからだ。日本は戦後、

世界に先駆けて自動車専用船を作るなど、加工貿易立国として独自路線を選んだ。韓国は独立記念館や安重根記念館を作り、歴史問題を国家発展の基軸に置いている。半面、日本は平和に対してどこか曖昧な認識の下に国家間連携を好む傾向が生まれた。

——韓日関係を好転させるヒントは。

戦後70年を迎え、世代も変わった。

歴史問題は、解決を目指すよりも世界人類のために活かすことが望まれる時代へと移ってきている。「10回の議論より1回の懇親、10回の懇親より1回の旅」といわれるように、人類の特性が開花するテーマを定め、共に協議・行動することが求められている。6カ国協議の枠組の国民版を元にした、国民国連構想と米国のスマートパワー、中国の和諧、韓国の和諍、オートピア、日本の出雲で生まれた和譲の中に、明るい未来を生み出すヒントがあるのであるのではないか。